

(様式1)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	栃木県	番号	09
-------	-----	----	----

推進地区名	協力校名	児童生徒数
鹿沼市	東小学校	733
塩谷町	玉生小学校	190
足利市	毛野小学校	593

○ 実践研究の内容

1. 推進地域における取組

(1) 「とちぎっ子学力アッププロジェクト」の推進について

- ① とちぎっ子学習状況調査
    - ・ 調査の実施日：平成29年4月18日（火）
    - ・ 参加校数：533校、参加人数：50,490名
    - ・ 調査結果送付：平成29年6月30日に各小・中学校及び各市町教育委員会に送付
  - ② とちぎっ子学力向上応援団派遣事業
    - ・ 10名の学力向上専門員を178校に派遣
  - ③ 学力向上推進リーダー配置事業
    - ・ 県内14市町に1名ずつ学力向上推進リーダーを配置
    - ・ 年間8回の研修の実施（先進県：秋田県、山口県視察を含む）
    - ・ 小学校国語と算数に関する指導の充実を図るための研修
  - ④ 学力調査結果活用研修会
    - ・ 小学校（10/19）、中学校（10/17）に悉皆で実施
    - ・ 参加校数及び参加人数：小学校 373校、387人  
中学校 163校、171人
    - ・ 本県の現状と課題に関する説明
    - ・ 文部科学省教科調査官を招聘し、算数・数学における指導に関する講話
  - ⑤ 市町教育委員会の指導主事を対象にした説明会の実施
    - ・ とちぎっ子学習状況調査結果活用説明会 平成29年7月14日（金）
    - ・ 全国学力・学習状況調査結果活用説明会 平成29年10月13日（金）
- (※各市町の学力向上に関わる取組をまとめた資料を基に情報交換を行った)

- ⑥ 市町教育委員会の指導主事を対象にした研修会の実施
  - ・ 平成29年9月12日（火）、12月22日（金）  
（※国語、算数・数学に関する演習等）
- ⑦ パワーアップ講座を県内3箇所で開催
  - ・ 全国学力・学習状況調査の結果から教科に関する課題を把握するとともに、その課題の改善に向けて教師の指導力の向上を図る研修会の実施
  - ・ 平成29年10月28日（土）、11月11日（土）、11月25日（土）
  - ・ 参加者：212名（小学校：161名、中学校：25名、指導主事：26名）
- ⑧ 教師用指導資料の作成・配布
  - ・ 教師用資料「授業改善に向けた3つの視点～学習評価を踏まえた授業の展開～」：15,000部
  - ・ 平成29年度全国学力・学習状況調査結果資料：2,000部
- ⑨ 保護者用リーフレットの作成・配布
  - ・ 小学校：21,300部、中学校：19,500部
- ⑩ 学力向上研究協議会（学力向上検証委員会）
  - ・ とちぎっ子学力アッププロジェクト等の施策を検証し、今後の学力向上に関わる施策等について協議し、県教育委員会が実施する学力向上対策の改善に資するための協議会を開催

第1回	平成29年9月6日（水）	とちぎっ子学力アッププロジェクトの取組状況、平成29年度全国学力・学習状況調査結果、今後の学力向上策について
第2回	平成29年12月6日（水） 12月11日（月）	学力向上推進リーダー配置事業の検証 とちぎっ子学力向上応援団派遣事業の検証
第3回	平成30年2月9日（金）	本県の学力向上対策の検証及び次年度以降の取組について

## 2. 推進地区における取組

### (1) 鹿沼市における取組

- ① 指導体制の構築
- ② アドバイザー（大学教授）の配置
- ③ 協力校校内研修への指導・助言
  - ア 本研究の概要の説明
  - イ アドバイザーによる講話
  - ウ 授業づくりにおける指導・助言
  - エ 思考力・表現力を育成するための指導の枠組構築のための指導・助言
- ④ 平成29年度全国学力・学習状況調査における調査結果の分析
- ⑤ 研究内容の一般化を目的とした研修会の実施
- ⑥ 学力向上の推進を目的としたリーフレットの作成
- ⑦ 先進地域への視察

## (2) 塩谷町における取組

- ① 塩谷町学力向上推進委員会の開催
- ② 塩谷町学力向上推進研究校の指定
- ③ 塩谷町放課後学習支援事業の実施
- ④ 塩谷町総合学力調査の実施
- ⑤ 学校・家庭・地域の連携充実に向けた取組

## (3) 足利市における取組

- ① 学力向上・指導力強化事業「かなふり松プロジェクト」の実施
  - ア 学力向上コーディネーター及び指導主事による学校訪問
  - イ 学習ボランティアの配置
  - ウ 先進地域への視察
  - エ 家庭学習の手引きの作成及び活用
- ② 市教育委員会、県教育委員会の指導主事による指導案検討及び授業研究会
- ③ 先進校視察
- ④ 研究発表大会の開催（11/10）

## 3. 協力校における取組

### (1) 鹿沼市立東小学校

- ① 授業改善及び教員の指導力向上を目的とした校内研修の充実
  - ア 授業づくり、授業実践
  - イ 思考力・表現力を育成するための指導の枠組の構築
- ② 全国学力・学習状況調査問題を活用した授業の実施
- ③ 授業と家庭学習の関連による数学的に考える力の育成
- ④ ティーム・ティーチングによる指導の工夫

### (2) 塩谷町立玉生小学校

- ① 心の育成
- ② 学ぶ意欲の向上・学習習慣
  - ア 指導体制の工夫・改善
    - i 少人数指導
    - ii ティーム・ティーチング
    - iii 習熟度別指導
  - イ ノート指導の充実
    - i ノートの使い方の共通理解
    - ii 学んだ過程の分かるノートづくり
  - ウ 家庭学習の習慣化
    - i 自主学習ノートの活用
    - ii 保護者への啓発
    - iii 家庭学習強化週間の設定
    - iv チャレンジノートコンクールとノートの展示

エ 読書の推進

③ 学びの質の向上

ア 授業研究・教材研究の充実

イ 学力調査の分析と活用

ウ 地域との連携

(3) 足利市立毛野小学校

① 教師力（指導力）の向上を目指した研修

ア 教師一人一人の課題に基づいた訪問研修

イ 同僚性を生かした校内研修

ウ 「研究通信」による共通理解

② 「毛野小スタンダード」を活用した授業改善

ア 目指す子どもの姿の明確化

イ 目指す授業スタイル「毛野小スタンダード」の作成

ウ 「毛野小スタンダード」に基づいた授業実践と児童の変容

③ 学力調査等の結果の有効活用

ア 正答率が低い問題への対応

イ 県教委作成のパワーアップシートの活用

ウ 今年度の重点課題への取組

④ 家庭学習の推進

ア 「家庭学習の手引き」の改善

○ 実践研究の成果

1. 協力校における取組の成果

(1) 鹿沼市立東小学校における取組の成果

全国学力・学習状況調査の結果や、単元末の評価テストの結果、教員によるアンケートの結果から、思考力・表現力の育成が図られつつある。

思考力・表現力を育成するための指導の枠組の構築や、思考力・表現力の育成をねらった授業改善及び授業の実施、全国学力・学習状況調査問題を活用した授業の実施、評価段階におけるピックアップ課題・学習活動による定着の確認等の取組が有効であった。

(2) 塩谷町立玉生小学校における取組の成果

ノート指導などを行うことにより、自分の考えや意見、学習の振り返り、感想等、自分の思いを書く機会が増え、書くことへの抵抗感が減ってきている。また、12月に調査問題を再び行ったところ、記述式の問題の正答率が大幅にアップし、無解答率も0%となった。自分の考えを自分の言葉で表現しようとする意欲や表現力がついてきた。

学校全体で自主学習の習慣化に取り組んだことで、学習時間が増えた。チャレンジノートコンクールなどの意欲付けにより、進んで学習する児童が多くなった。また、家庭学習強化週間やノーメディアデーなど、学校からの発信で保護者への啓発もでき、家庭での学習が安定してきた。

自力解決への抵抗感は少なくなってきた。また、グループ同士の話し合いも活発になって

きた。話し合い活動を多く設定し、それらを通して自分の考えを深めたり、広げたりすることができている児童が増えたことから、学び合うことのよさを感じている児童が増加したことがうかがえた。

### (3) 足利市立毛野小学校における取組の成果

平成29年度の全国学力・学習状況調査の「教科に関する調査」では、全ての教科で、全国平均正答率との差が縮まり、平成27年度や平成28年度の調査結果と比較すると正答率が向上した。

全国学力・学習状況調査の「児童に対する質問紙調査」では、「学習に対する関心・意欲・態度」「規範意識・自尊感情」「学習の基盤となる活動・習慣」の全ての領域で、平成28年度の調査結果より肯定的に回答している児童の割合が高くなった。これは、教師の日々の授業に対する意識の変化や指導方法の改善及び家庭における学習環境の向上が影響していると考えられる。

全教職員の同僚性がさらに高まり、意欲的に学力向上を目指した研究に取り組むことができた。訪問研修や授業研究を通して、目指す「学び合い高め合う子どもの姿」や目指す授業スタイルについて共通理解ができ、授業に対する意識が変わり、授業改善や指導力向上につながった。

児童の主体的な学びを育てるための「毛野小スタンダード」を作成し、日々の授業改善に取り組むことができた。特に、「お互いの考えを深める・広げる」手立てとして、ペアやグループなどを積極的に取り入れた結果、教え合ったり、質問し合ったりする児童の学び合う姿が多く見られるようになった。

## 2. 実践研究全体の成果

全国学力・学習状況調査の結果について、平成28年度と平成29年度における本県の平均正答率と全国平均正答率を比較すると、8教科中7教科で全国との差が±0.5ポイント以内となった。

また、中学校国語Aを除く全ての教科で、全国との差が昨年度を上回った。

### <全国学力・学習状況調査における全国と本県の平均正答率の差>

	小学校				中学校			
	国語A	国語B	算数A	算数B	国語A	国語B	数学A	数学B
H29	0.1	-0.4	0.1	-1.3	-0.2	0.4	-0.5	-0.1
H28	-2.3	-1.9	-2.6	-2.0	0.1	0.1	-1.0	-1.0

全国学力・学習状況調査における児童生徒質問紙調査結果から、本県全体では「目標（めあて・ねらい）の提示」に関して、「当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、平成28年度と比較して小学校で2.2ポイント、中学校で7.8ポイント増加した。また、「学習を振り返る活動の実施」に関しては、小学校で2.5ポイント、中学校で3.0ポイント増加した。

協力校の3校における全国学力・学習状況調査結果については、平成28年度と平成29年度

で比較すると、ほとんどの教科で上回った。

年3回開催した学力向上研究協議会（学力向上検証委員会）において、とちぎっ子学力アッププロジェクトに関する検証を行い、委員からとちぎっ子学力向上応援団派遣事業や学力向上推進リーダー配置事業の有効性などについて意見が出された。

### 3. 取組の成果の普及

平成30年1月26日に開催した栃木県教育研究発表大会において、推進地区や協力校の取組について発表した。

県教育委員会のホームページに「学力向上通信」を掲載し、調査結果の活用や学習指導に関する情報を提供した。

授業改善を図るために、学習評価を踏まえた取組を提案したリーフレット「授業改善に向けた3つの視点～学習評価を踏まえた授業の展開～」を作成した。

推進地区では、研究発表大会を開催し、研究授業を公開し、事業内容等を記載したリーフレットや保護者向けの啓発資料を作成・配布したりして、広報誌等で取組の成果の普及を図った。

### ○ 今後の課題

- ・ 各学校における調査結果を活用した検証改善サイクルの自校化や学習内容の確実な定着を図る。
- ・ 本プロジェクトに関わる取組等を通して、一層の教師の指導力向上を図るとともに、評価を意識した授業改善を促進していく。
- ・ 市町教育委員会との連携を密に図りながら、各学校の学力向上に関わる取組に対して、きめ細かに支援していく。

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の  
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	栃木県	番号	09
-------	-----	----	----

推進地区名	鹿沼市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

新学習指導要領では、「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等」や「生きて働く知識・技能」、さらに「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等」を、育成すべき資質・能力の三つの柱としている。

また、本市では、全国学力・学習状況調査の教科に関する調査において、本市の平均正答率と全国平均正答率を比較すると、知識・技能とともに、知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実施し、評価・改善する力などのいわゆる「活用」する力に課題がある。

この三つの柱や本市の学力に関する現状と課題から、これらの資質・能力をバランスよく育成していく必要があると考えている。

つまり、個別の知識・技能を充分定着させてから思考力・判断力・表現力等の育成を図るのではなく、どのように学ぶかといった主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を通して、これらの資質・能力をバランスよく育成していこうと考えている。

特に、授業づくりにおいては、授業が児童の「深い学び」となっているか、また、「対話的な学び」によって、自己の考えを広げ深めることができているかといった視点を大切にしていきたい。

2. 研究課題への取組状況

(1) 指導体制の構築

大学の研究者や県教育委員会担当者、協力校の研究リーダー、市内研究学校のリーダー、及び市教育委員会の担当による「学力向上推進協議会」を設置し、研究の方向性や研究の評価等を協議したり、協力校への指導・助言をしたりしていくこととした。

- ・ 研究の方向性及び内容の検討
- ・ 協力校課題推進委員との研究の方向性及び内容の検討
- ・ 研究内容の確認
- ・ 研究授業及び公開研究授業参観
- ・ 協力校における研究課題への取組状況の確認
- ・ 協力校第5学年児童を対象とした学力調査の分析結果の検討と、研究の評価の検討

実施日	内 容
2017/6/28	研究の方向性及び内容の検討
2017/8/24	研究内容の確認
2017/10/23	協力校における研究課題への取組状況の確認
2017/11/24	協力校における研究のまとめの検討
2018/ 2/ 2	研究の評価の検討

## (2) アドバイザーの配置

協力校と日常的に連携、協力しながら学力向上に対する指導・助言を専門的な観点から行うためのアドバイザーを配置した。

特に、授業づくりについては、指導者が授業を構想する段階から関わり、協力校とともに実施していくことを基本とした。

- ・アドバイザー：宇都宮大学教育学部准教授 牧野智彦先生

## (3) 協力校校内研修への指導・助言

本研究では、「主体的・対話的で深い学び」の視点から、授業を質的に改善し、児童の思考力・表現力を育成していくことを研究の主目的としている。そこで、この視点に焦点化して、校内研修への指導・助言をしていくこととした。

### ア 本研究の概要の説明

協力校の全教員を対象に、研究の趣旨や研究の指導体制、鹿沼市及び協力校の学力に関する現状と課題、研究課題、取組内容、成果等の把握と検証の手立て等について改めて説明した。

研究2年目となる本年度の研究は、主体的・対話的で深い学びのうち、「対話的な学び」、「深い学び」に焦点化すること、学校が取り組む課題として設定している「学び続ける児童」とのかかわりで、数学的な考え方のうち、発展・統合の考え方の育成を中心に取り組んでいくことについて、共通理解を図った。

### イ アドバイザーによる講話

研究を推進するにあたり、学習指導要領改訂の方向性や新しい時代に必要とされる資質・能力について、算数科で期待される思考力・表現力について、さらにそれを育成していくための授業改善のポイントを、教員が理解し整理していくことが大切であると考え、アドバイザーによる講話を実施した。

アドバイザーからは、新学習指導要領解説算数編をもとに、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善のポイントについて、具体例とともに示された。

### ウ 授業づくりにおける指導・助言

本研究における授業づくりについては、指導者が授業を構想する段階から関わり、協力校とともに実施していくことを基本とした。

実施日	内容	学年・教材等	指導者	協力校及び参観者
2017/6/28	提案授業	第5学年 「きまりを見つけて」	宇都宮大学 牧野智彦先生 栃木県教育委員会 長嶋裕子先生 栃木県教育委員会 福田 誉先生 鹿沼市教育委員会 湯澤正弘 鹿沼市教育委員会 吉江 紫	全教員
2017/8/24	授業の構想 指導案検討	第5学年 「面積の求め方を考えよう (台形)」	宇都宮大学 牧野智彦先生 鹿沼市教育委員会 吉江 紫	課題推進委員 授業者3名
2017/10/23	指導案検討		宇都宮大学 牧野智彦先生 栃木県教育委員会 長嶋裕子先生 鹿沼市教育委員会 湯澤正弘 鹿沼市教育委員会 吉江 紫	課題推進委員 授業者3名
2017/11/15	プレ授業 授業研究		宇都宮大学 牧野智彦先生 鹿沼市教育委員会 湯澤正弘 鹿沼市教育委員会 吉江 紫	課題推進委員 授業者3名
2017/11/24	研究授業 授業研究会		宇都宮大学 牧野智彦先生 栃木県教育委員会 長嶋裕子先生 栃木県教育委員会 福田 誉先生 鹿沼市教育委員会 湯澤正弘 鹿沼市教育委員会 吉江 紫	全教員 他校等参観者26名

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善にあたって、授業を構想する段階では、まず、教員の授業スタンスの変換をねらった。その視点として、教員は知っている人・教える人、児童は知らない人・教わる人というような関係ではなく、教員と児童は共に学ぶもの同士の関係であること、また、児童の考えや児童がどのように考えたのかを知ろうとする姿勢・態度を大切にすることとした。

次に、授業改善の視点である「深い学び」については、その鍵となるのは、「見方・考え方」であり、習得・活用・探究という学びの過程の中で、数学的な見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることが実現できるかどうかポイントとなるであろう。そのためにも、この段階において、児童が数学的活動を行うことによって、学びがどのように深まるかを明らかにしておく必要があり、指導の大切なポイントとした。

さらに、「対話的な学び」については、子供同士の協働、教員との対話、既習事項を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深めることが実現できているかが重要である。学び合いによる算数の授業の要件としては、「もっと簡潔にできないか、もっと明確にできないか、もっとまとめられないか」という、算数に関わるよりよいものを創りだそうとする「問い」を持たせる必要がある。また、その「問い」を解決するために、数学的活動に従事する。さらに、互いの意見に耳を傾け合い、どんな意見でも「それは本当か」を自分たちで確かめ合って、疑問が残れば、それをさらにみんなで考え合う、という活動を行う必要がある。

このような視点から、授業の展開を捉え直し、授業を構想していくことが肝要であり、指導のポイントとした。

## エ 思考力・表現力を育成するための指導の枠組構築のための指導・助言

1時間の授業では、討論も対話も、知識の習得も活用も探究もすべて実現しなければならないと思うのではなく、単元や題材という一定のまとまりの中で、習得・活用・探究という学習サイクルをどうデザインするか、という観点から取り組んでいくことが大事であるため、「単元」というまとまりでの授業デザインをしっかりと行うよう指導・助言を行った。

(4) 平成29年度全国学力・学習状況調査における調査結果の分析

協力校第5学年児童を対象に、平成29年度全国学力・学習状況調査 教科に関する調査算数A、算数Bを実施し、その解答状況を平均正答率や、無解答率等から分析し、研究の成果や課題について、明らかにした。

(5) 研究内容の一般化を目的とした研修会の実施

市内小中学校教員を対象とし、協力校の研究内容やその成果を発表する場としての研修会を開催した。

実施日	内容	学年・教材等	授業者及び指導者	協力校及び参観者
2017/11/24	公開授業 授業研究会	第5学年 「面積の求め方を考えよう (台形)」	○授業者 鹿沼市立東小学校教諭 秋澤貴之教諭 児山徳幸教諭 鈴木和彦教諭  ○指導者 宇都宮大学 牧野智彦先生 栃木県教育委員会 長嶋裕子先生 栃木県教育委員会 福田 誉先生	東小学校教諭 他校等参観者 全64名
	講話	「算数の授業づくり -主体的・対話的で深い学 びの視点から-」	○講師 宇都宮大学 牧野智彦先生	他校等参観者 全26名

(6) 学力向上の推進を目的としたリーフレットの作成

本市の学力向上における基本的な考えやその方向性、事業内容、協力校の成果等によるリーフレットを作成し、本市の教職員に配布し、啓発を図った。

(7) 先進地域への視察

実施日	研修会等	内容	参加者
2017/11.2~3	福井教育フォーラム	授業参観や講演、シンポジウムを通して、学力上位県の秘密を探り、今後の学力向上策の参考にする	鹿沼市教育委員会指導主事1名 鹿沼市立東小学校教諭2名

3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 知識・技能の習得及び思考力・表現力の育成について

小学校第6学年の児童を対象とした平成29年度全国学力・学習状況調査の教科に関する調査における協力校の調査結果は、算数A、算数Bともに、国の平均正答率を上回り、「やや優れている」状況であった。特に、評価の観点の一つである「数学的な考え方」においても、国の平均正答率を上回り、「やや優れている」状況であった。また、記述式による問題では、5問中4問が国の平均正答率を上回った。

	算数A	算数B
全国平均正答率との比較	やや優れている	やや優れている

協力校での「単元」というまとまりでの授業デザインによる指導の枠組の構築や、全国学力・学習状況調査のB問題を活用した授業の実施、授業と家庭学習の関連による数学的に考える力の育成をねらった取組が有効であったと推察できる。

特に、授業と家庭学習の関連による数学的に考える力の育成をねらった取組では、まず、授業で解決した問題(原題)を、発展的に捉えさせ、問題の一部などを替えることにより新たな発展問題を自分の力でつくる。数学的な思考力や表現力の育成をねらいとした授業では、この発展問題を家庭学習の課題とし、本時の学習が本当に理解することができたかどうかの評価問題(適用問題)とした。

また、単元末の評価の段階においては、前述した授業で実施した評価問題を再度出題し、その定着状況を確認することとし、さらに、その定着の状況により必要に応じて学び直しを行ったことが有効であったと考えている。

## (2) 授業改善及び教員の指導力向上について

研究授業実施者のリフレクションや教員の変容等を把握するアンケートを実施した結果、以下のような肯定的な回答が得られたことから、授業改善及び教員の指導力向上が徐々に図られつつあると捉えている。

- ・算数科における思考力、表現力とは何かについて、具体的に理解することができた。
- ・学び合いは、交流し、新たな発見をしたり、自分の考えを見直したりすることにより、学びを深めるものだという考えをしっかりと理解しておかなければならないと思った。ただグループ活動やペア活動をさせるというのではなく、意図をもち、児童の学びが交流によってさらに深いものになるよう工夫を考えていきたいと感じた。

授業改善及び教員の指導力向上については、アドバイザーを配置し取り組んだ。

授業づくりにおける授業を構想する段階では、まず、授業のねらいが思考力を育成する授業なのか、あるいは表現力を育成する授業なのかを明確にすること、次に本時における数学的な見方・考え方及び数学的な表現力とは何かを教員が十分理解することが重要であり、この点が「深い学び」と関連していると考えている。

また、「対話的な学び」については、子供同士の協働、教員との対話、既習事項を手掛かりに考えること等を通じて、子供たちが自己の考えを広げ深めることが実現できているかが重要である。そのためには、教員が子供の考えをつなぎながら学び合いを展開していくなどの指導技術を身に付けておかなければならない。

授業づくりにおけるアドバイザーの指導・助言が、このような点を中心としたものであったため、授業改善及び教員の指導力向上について、有効であったと推察できる。

## (3) 研究内容の一般化に向けて

研究内容の一般化に向け、研修会を実施した。今回の研修会では、協力校で実践した授業づくりの基本的な考えを市内の小中学校に伝えることを目的としたものであった。そのため、アドバイザーによる「算数の授業づくり」の講話を実施した。

参加者からは、授業を構想するにあたって、授業のねらいの焦点化や、数学的に考えること、数学的に表現することなどについてしっかり考えていくことの大切さについての感想が寄せられ、目的に沿った研修会が実施できたと感じている。

## 4. 今後の課題

### (1) 授業改善及び教員の指導力向上について

協力校では、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善について共通理解を図り、それらを生かした授業実践に取り組んだ。

「深い学び」については、数学的な見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かうなどの児童の学習活動が必要である。そのためには、算数という教科はどういう教科で、この教科を通して子供たちにどのような資質・能力を育成していくのかを教員が十分理解して指導に当たらなければならない。小学校では、学級担任による教科指導が中心であり、算数を専門とする教員も多くない。このような状況の中で、子供たちに「深い学び」を保障していくためには、算数の本質を学ぶ研修を、計画的に実施していかなければならないと考えている。

「対話的な学び」については、子供同士の協働、教員との対話、既習事項を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深めることが実現できているかが重要である。学び合いによる算数の授業の要件としては、「もっと簡潔にできないか、もっと明確にできないか、もっとまとめられないか」という、算数に関わるよりよいものを創りだそうとする「問い」を持たせる必要がある。また、その「問い」を解決するために、数学的活動に従事する。さらに、互いの意見に耳を傾け合い、どんな意見でも「それは本当か」を自分たちで確かめ合って、疑問が残れば、それをさらにみんなで考え合う、という活動を行う必要がある。

このような活動が、教員のコーディネートにより児童主体の活動として展開していくことが理想である。そのためには、教員が児童の意見や考えをつなぎながら学び合いを展開していくなどの指導技術を身につけておく必要があり、今後研究実践の必要性を痛感している。

### (2) 研究内容の一般化について

本市の学力向上における基本的な考えやその方向性、事業内容等を記載したリーフレットを作成したり、研修会を開催し協力校の成果等を公表したりした。しかし、主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善は、まだ十分ではない。今後は、研究の対象を中学校にも広げ、実践していきたい。

また、学力向上については、家庭の協力が不可欠である。保護者及び地域等へも積極的に本市の学力向上における取組等について啓発を図っていく。

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の  
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成 29 年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	栃木県	番号	09
-------	-----	----	----

推進地区名	塩谷町
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

「学校の取組を中核に家庭・地域との連携を図った学力向上策の確実な実践」

人口減少や少子高齢化の顕著な本町にとって、将来の町を担う子どもたちの生きる力や学力を高めることは喫緊の課題であり、学校が中核となった取組を進め、家庭・地域がそれぞれの役割を果たし連携・協力することで、さらに効果が上がるものと考えている。

町内の各小中学校では、それぞれに学力向上プランを作成し、子どもたちの学習意欲を高め、基礎的・基本的な知識や技能を確実に習得させ、それらを活用して思考力や判断力、表現力を育成するための授業づくり、地域人材の活用、体験を重視した学習活動や探究活動の推進、読書活動の充実など、学校や地域の特色を活かしながら、学力向上の取組を進めている。

町としては、これらを一体化させるため「塩谷町の将来を担う子どものため、学力を高めましょう」として、「心の育成」「学ぶ意欲の向上」「学びの質の向上」の3つの視点で学力向上の取組を整理することで、町全体で学力向上の機運を高めることとしてきた。今年度は、これまでの取組を基盤としながら、学校での授業力向上に重点を置くため、県の事業である「学力向上推進リーダー配置事業」「学力向上応援団事業」、町の事業である「塩谷町学力向上推進事業」とを一体的に取り組んできた。

2. 研究課題への取組状況

本町では、塩谷町学力向上推進事業として、全町的な取組を実践してきた。

(1) 塩谷町学力向上推進委員会の開催

有識者と学校関係者からなる「塩谷町学力向上推進委員会」を組織し、学校訪問や学力向上策の調査・協議などを通して、授業の質的改善に向けた具体的な取組について検討し、町全体としての重点的な取組の方向性を示してきた。委員には、学力向上応援団の専門員、学力向上推進リーダーを加えることで、県の方針や町の考えを一体的に捉えた取組となるよう配慮するとともに、学校、家庭、地域に向けた啓発資料の作成などを行ってきた。次年度当初に、周知資料を発行する予定である。

【学力向上推進委員会の様子】



写真1：学力向上推進リーダーによる授業



写真2：学力向上推進委員との授業研究会

【平成30年度発行（予定）リーフレット】



資料：リーフレット（表面）

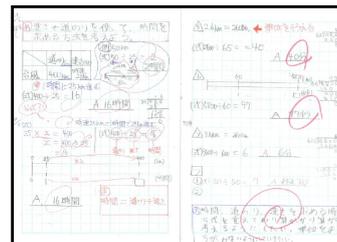


資料：リーフレット（裏面）

(2) 塩谷町学力向上推進研究校の指定

本実践研究の協力校として塩谷町立玉生小学校を塩谷町学力向上推進研究校に指定し、学校、家庭、地域の一体的な取組を特に重点的に行い、その成果や課題を町全体に広められるよう研究を委託した。

その結果を、学力向上推進委員会の協議の際の重要な意見として扱い、町全体の共通重点取組内容とした。特に、「ノート指導の充実」「自主学習の推奨」「小中連携による家庭学習習慣の実施」「ノーメディアチャレンジシートの重点的活用」を進めるなど、全町的な取組を行ってきた。



資料：構造的な板書とノート指導



資料：自主学习ノートの家庭学習強化週間



資料：ノーメディアチャレンジシート

また、研究授業が全学年対象に行われ、栃木県教育委員会学校教育課学力向上推進室 長嶋 裕子 副主幹に指導いただきながら、「主体的・対話的で深い学びにつながる算数科指導の在り方」について研究を深めてきた。町教育委員会からも、学校での取組と家庭・地域と連携した取組について、指導助言を行ってきた。

町学力向上推進委員会の学校訪問では、最終回を本校で行い、今年度の重点取組事項についての確認や、学校・家庭・地域の連携による学力向上などについて成果と課題を確認することができた。

加えて、学力向上研修会を開催した。玉生小学校に限らず、町内全小中学校、教育事務所管内の小中学校にも開放し、横浜国立大学 石田 淳一 教授の提案授業及び講話を視聴することで、言語活動を有効活用した活用型の授業の展開について、多くの教職員にとって有意義な示唆が得られた。



資料：学力向上研修会案内通知



写真：学力向上研修会講演の様子

### (3) 塩谷町放課後学習支援事業の実施

平成28年度より、基礎・基本の定着に課題を有する児童を主たる対象として、塩谷町放課後学習支援事業「ステップアップ学習塾」を全小学校で実施し、年間25回程度ずつ放課後学習を行ってきた。全課程を修了した児童には、教育委員会作成の「がんばり賞」を発行し、意欲の向上と継続に向けた取組とする予定である。



写真：放課後学習「ステップアップ学習塾」

各会場の指導者に対する研修を実施の上、支援訪問と併せて実施状況を確認するなど、より効果的な学習指導がなされるよう指導・助言を行ってきた。



資料：「ステップアップ学習塾」がんばり賞

#### (4) 塩谷町総合学力調査の実施

年度末に中学3年生を除く全児童生徒を対象に国語・算数（数学）の2教科の塩谷町総合学力調査を実施の上、町学力調査結果説明・研修会として学力把握と取組の検証を行って、さらなる支援策を検討してきた。

#### (5) 学校・家庭・地域の連携充実に向けた取組

学校を中核とした授業での取組や、家庭・地域から協力を得るための年間を通じた小中一貫した取組などを、塩谷町学力向上推進委員会において協議し、実践してきた。これらの取組を学校HPや学校だよりで広報周知してきた。

また、地域人材を利活用するために、町の地域教育力活性化事業（教育委員会事務局生涯学習課主管）とも連携しながら、年間78件（見込み）の地域との連携を図った事業を行ってきた。



写真：1年生生活「虫探し」



写真：1年生体育「水に慣れる」



写真：3年生総合「ぼうじぼづくり」

### 3. 実践研究の成果の把握・検証

#### (1) 全国学力・学習状況調査・とちぎっ子学習状況調査による学力の把握

全国学力・学習状況調査及びとちぎっ子学習状況調査の平均正答率の変化により把握した。その結果、平成29年度の小学5年生の算数「基礎・基本」、小学6年生、算数Aの町平均正答率が前年度比で向上が見られた。

また、母集団平均の無解答率と比較して、大きく下回る状況となっており、主体的な取組へのよい傾向と言える。

#### (2) 学力向上推進委員会における授業の質的改善のための重点事項の取組

本町の学力向上の課題に基づきノート指導の徹底により、授業の質的な改善を促してきた。

その結果、教職員を対象とした意識調査では、「よい取組」「概ね良い取組」と回答した教職員の割合が非常に高くなっており、全国学力・学習状況調査の学校質問紙と比較しても、様々な意識の向上が見られた。

### (3) 放課後学習支援事業における参加者の意識の推移

放課後学習支援事業の参加児童の出席統計をとり、全員がほぼ毎回参加し、無事に修了することができた。

7月と11月の2回、参加児童とその保護者の意識調査を実施し、経年変化を把握してきた。その結果からは、児童が「分からないところがわかるようになった」「勉強の仕方がわかった」「苦手意識がなくなった」など、本学習支援事業の参加動機に直結する部分の満足率が高くなっていた。主体的な学習態度の育成と、基礎的・基本的な学習内容の定着についても、成果が見られたものと考えられる。

併せて、指導者からは担任との連携を図ることができるようになり、受講者の授業時の活躍に対する賞賛や、支援に役立てることが進んできているとの報告を受けている。

### (4) 家庭・地域との連携

家庭の理解協力に関しては、各学校での家庭学習の投げかけをすることで、家庭学習及び自主学習への児童の取組率が各学校で高まっている。全国学力・学習状況調査及びとちぎっ子学習状況調査での、家庭学習の取組は、いずれも母集団平均を上回り、よい取組が続いている。

また、町広報紙に学力調査結果を特集として掲載し、学校での取組、家庭での取組、地域での取組に分けて発信することができた。

#### 《家庭では》

これまでと比較して好ましい傾向も現れてきています。しかしながら、依然として課題となる傾向が続いている項目もあります。さらに児童生徒の学力の定着を図るために、以下のような取組みをお願いします。

- 基本的な生活習慣を身につけさせましょう。
  - ・あいさつや食事、就寝、起床時刻など規則正しい生活リズムを身につけると、児童生徒の本も持っている力が高まります。
- 家庭で主体的に学習する習慣を身につけさせましょう。
  - ・普段の家庭での学習習慣は定着しています。学校からの宿題だけでなく、予習や復習、自主学習等に主体的に取り組むことで、幅広い学力が定着します。
- 日常生活の中で社会のルールやマナーを身につけさせましょう。
  - ・思いやりの心や社会性などの豊かな心を育むことができます。
  - ・行末について語り合い、誉や希望をもたせることができます。
  - ・褒めて励ますことを日常的に行うと自尊心が高まり、自信をもって行動することができます。
- ボランティア活動や地域の行事に積極的に参加させたり、郷土の自然や文化にふれる体験をさせたりしましょう。



資料：町広報12月号に掲載「塩谷の子どもの高めましょう」（一部抜粋）

## 4. 今後の課題

2か年の取組で残された課題は、活用型の問題の授業への位置付けと個別の家庭の理解協力の更なる促進である。今年度の取組を継続しながら、次年度は下記の2点を重点的に取り組んでいく必要がある。

- ・ 活用型の問題の授業への位置付け

活用型の授業展開を進めるため、年間指導計画に活用型の問題を明示し、週案作成ソフトとリンクさせることで利活用を促進し、言語活動を用いた協働的な学びと

なるよう学年間の系統性を図る研究を進める。

- 家庭の理解協力の促進

学校からの情報発信を継続しながら、特に働きかけの必要となる家庭への支援を、学校のみならず保育機関や社会教育と連携しながら働き掛けを継続していく。

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究(小・中学校)」

平成29年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	栃木県	番号	09
-------	-----	----	----

推進地区名	足利市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

自ら学ぶ意欲と自ら考え主体的に判断し、行動できる資質や能力を育成することは、生涯学習を充実させていくための学習指導の中心的な課題である。

したがって、内発的な学習意欲を喚起し、自ら学ぶ意欲や思考力・判断力・表現力を学力の中核をなすものとして捉え、そのことがその後の学習や生活において、生きて働くように確実に身に付けさせることが大切である。また、指導に当たっては、教師自身が指導内容に精通するという基本的な考え方のもと、児童生徒の実態を踏まえ、一人一人のよさや可能性を引き出し、生かしながら自ら学びとる過程を重視した指導の工夫に努めることが重要である。

(1) わかる授業の展開

- ① 基礎的・基本的な内容を確実に身に付けるための指導の充実に努める。
  - ・ 児童生徒の実態を踏まえた指導内容の重点化
  - ・ 1 単位時間のねらいの明確化
  - ・ 板書の工夫
  - ・ 補充学習の充実
  - ・ 振り返りによる学習内容の確実な定着
  - ・ ねらいに関する達成状況の確認と評価
- ② 思考力・判断力・表現力等を育成するための指導の充実に努める。
  - ・ 各教科・領域、各学年相互の関連を図った系統的、発展的な指導計画の作成
  - ・ 体験的な学習・問題解決的な学習、探究的な活動の充実
  - ・ 一人一人が考えを深めるための時間の確保
  - ・ 考えを深めるための練り合い、学び合いの場の設定
  - ・ 「総合的な学習の時間」と各教科等との関連を図った学習活動
  - ・ 観察・実験・レポート作成・論述・記録・要約・説明など、知識・技能を活用する言語活動の充実
  - ・ ICT機器の効果的な活用

- ③ 自ら学ぶ態度を育成し、学習意欲を高めるための指導の工夫に努める。
  - ・ 児童生徒の意欲を喚起し、学習内容に関して見通しがもてる導入の工夫
  - ・ 児童生徒が興味をもって思考を深めることができる発問の工夫
  - ・ 一人一人の実態に応じて目標をもたせることによる意欲の喚起
  - ・ 授業で守るきまりの明確化
  - ・ 「家庭学習の手引き」等を活用した家庭学習の意義に関する指導
- ④ 教材研究を重視し、日常の授業研究の充実に努める。
  - ・ 児童生徒の実態を踏まえた教材研究と授業評価の実施
  - ・ 地域の自然や文化財等の教材化、人と学び合う活動の推進
- ⑤ 一人一人のよさや可能性を多面的、継続的に把握し、児童生徒一人一人を生かすきめ細やかな学習支援に努める。
  - ・ 少人数指導やチーム・ティーチングの充実
  - ・ 一人一人の実態に即した個別指導の充実
- ⑥ 小中学校での学習の円滑な接続を踏まえ、指導内容の充実に努める。
  - ・ 学習内容や指導事項の系統性を踏まえた指導の充実
  - ・ 児童生徒の発達段階を考慮した指導の充実

## (2) 学びの成長の把握

- ① 一人一人の学習の習得状況を捉え、次の学習に生かすための方法を工夫し、学習内容の確実な定着に努める。
  - ・ 共感的な理解に基づいた事前・事中・事後の評価の工夫
  - ・ 自己評価能力育成のための評価方法の工夫
  - ・ 家庭学習状況の把握、各種たよりによる啓発の推進と習慣化
- ② 指導目標に即した観点別の評価規準を作成し、児童生徒の学習状況の継続的、総合的な評価に努める。
- ③ 基礎・基本の定着と学力の向上に向け、学習指導の改善のために、テストバッテリーや全国学力・学習状況調査等の結果分析、活用に努める。

## (3) 共に学び合う人間関係づくり

- ① 一人一人の個性を尊重し、共に学び合う人間関係を育む学級づくりに努める。
- ② 意欲をもって学習に取り組めるような学習環境づくりに努める。
- ③ 教師と児童生徒、児童生徒同士の認め励ます言語環境づくりに努める。

## 2. 研究課題への取組状況

### (1) 協力校へのかかわり

- ① 研究授業を行う際に、市教委、県教委の指導主事が、事前の指導案検討に加わり、指導助言を行った。
- ② 研究授業には、市教委、県教委の指導主事が訪問し、授業を参観した。分科会において、各授業に対する指導助言を行うとともに、全体会においては、本研究の進捗状

況の確認と指導講評を行ったり、講話を行ったりした。

- ③ 協力校に訪問する前には、指導主事が本研究の進捗状況を踏まえ、成果と課題及び方向性について話し合い、指導助言の内容を確認した。
- ④ 県教委と市教委で連絡を密に取り、本研究の進捗状況を踏まえ、成果と課題及び研究の方向性について共通理解を図った。
- ⑤ 協力校からの要請に応じて、研究授業が行われない日においても、月に数回程度、指導主事が訪問し、随時、授業参観や指導助言を行った。
- ⑥ 11月10日に市内小中学校から多くの参観者が来校し、研究発表会を行った。授業を公開するとともに、研究の概要について発表し、本研究の成果の普及を図った。

## (2) 本市の取組

本年度より、学力向上・指導力強化支援事業として「かなふり松プロジェクト」を立ち上げ、次の4点を柱とし推進してきた。

- ① 「学力向上コーディネーター及び指導主事による学校訪問」では、小・中学校9年間の学びの連続性を重視し、各校年間5回の訪問を実施した。主体的に学習に取り組む態度を養うためには、児童生徒が授業で「わかった」「できた」という自信を積み重ねることが大切である。そのため、訪問では「この授業で何を学ぶのか」という目標の明確な提示、考えを深めるための学び合いの工夫、理解したことを整理する振り返り等を重点として指導し、教師の授業力の向上を図ってきた。学校では授業を互いに見合ったり、教材研究の時間を確保したりする等、日々の授業を見直し、授業改善に努めているところである。
- ② 「学習ボランティアの配置」については、退職された教員11名に依頼して、放課後や夏休み、土曜日等に学習会を実施することができた。宿題や自主学習等に意欲的に取り組み、わからないところはボランティアの先生に質問する等、児童生徒が自ら学習に取り組む姿が見られた。
- ③ 「先進地域の視察」では、全ての指導主事がチームを組み、他県6市の教育委員会や学校の様子を視察し、本市の課題解決のための参考となる情報を収集することができた。本市の取組に生かせる点について話し合い、次年度の教育施策に繋げていきたい。
- ④ 「家庭学習の手引きの作成及び活用」については、本市の児童生徒の実態と課題をもとに保護者用リーフレット「足利版家庭学習の手引き『学びのすすめ』」を作成した。各学校において、保護者に生活リズムの大切さや子供とのかかわり方、家庭学習のポイント等について、説明を加えながら配付し、家庭学習の啓発を図った。また、公民館の各種講座や家庭教育懇談会等において、教育長や教育委員会事務局職員のあいさつの場で取り上げ、その活用について周知した。さらに、PTA連合会の教育懇談会や各学校の本部役員会等においてもテキストとして活用した。

### 3. 実践研究の成果の把握・検証

#### (1) 全国学力・学習状況調査の結果分析

- ① 平成29年度の全国学力・学習状況調査の「教科に関する調査」では、国語A（主として知識）・国語B（主として活用）・算数A（主として知識）・算数B（主として活用）の全ての調査で、全国平均正答率との差が縮まり、平成27年度や平成28年度の調査と比較すると正答率が向上した。これは、調査対象の児童が異なるため全て研究の成果とは考えられないが、指導方法の改善による成果も含まれると考える。

#### (2) 県が実施する「とちぎっ子学習状況調査」及び市が実施する「テストバッテリー」の結果分析

- ① 小学4年生と小学5年生が実施している「とちぎっ子学習状況調査」では、平成29年度と平成28年度を比較すると、5年生国語以外は県との差が広がってしまい、学力面での成果は見られなかった。
- ② 小学校3年生と4年生が実施している「テストバッテリー」は、本年度2月9日に実施した。調査結果を分析し、成果と課題を検証していきたいと考えている。

#### (3) アンケート等の実施及び結果分析

- ① 全国学力・学習状況調査の「児童に対する質問紙調査」では、「学習に対する関心・意欲・態度」「規範意識・自尊感情」「学習の基盤となる活動・習慣」の全ての領域で、平成28年度の調査結果より肯定的に回答している児童の割合が高くなった。これは、教師の日々の授業に対する意識の変化や指導方法の改善及び家庭における学習環境の向上が影響していると考えられる。
- ② 具体的には「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」という質問に対して「当てはまる」と回答した児童が、約6%増加した。これは、教師が主体的に自身の課題解決に取り組むとともに、児童へのかかわり方を意識し、授業改善を図ったことが要因として考えられる。また、「家で、自分で計画を立てて勉強していますか」という質問に対して「している」と回答した児童が、約11%増加した。これは、保護者との連携によって、今まで以上に家庭学習に力を入れ始めたことによる成果であると考えられる。

#### 4. 今後の課題

- 全国学力・学習状況調査の「教科に関する調査」から、国語及び算数のどちらの教科も記述式の問題の正答率が低くなっている。この課題を解決していくためには、日々の授業において、「目的や意図に応じ、自分の考えを書く」、「目的に応じて、自分の考えを明確にしながら読む」、「図や式を関連付けて、式の意味を説明することができるようにする」等の力が着実に身に付くような学習活動を展開していく必要があると考える。
- 単元を通して児童に身に付けさせたい力、目指したい子どもの姿が着実に身に付いたかどうか、的確に評価していくための検証方法を見直していく必要がある。
- これまで取り組んできた『毛野小スタンダード』（各授業において、「学習の見通しをもつ」過程、「自分の考えをもつ」過程、「お互いの考えを深める・広げる」過程、「学習内容を振り返る」過程を実施）に基づいた授業実践は、新学習指導要領に示されている「主体的・対話的で深い学び」に通じていると考える。しかし、学習の見通しがもてるような課題の設定や、児童の学びの定着につながる振り返りがまだ十分とはいえない。これからも、協力校が授業改善の手立てとして作成した『毛野小スタンダード』をさらに充実させ、着実な実践に取り組んでいく必要がある。
- 本研究で得た成果を継続し、いかに日々の授業へ定着させ、日常的な取組にしていくかが重要であると考えます。
- 次年度以降も、県の事業である「とちぎっ子学力向上応援団派遣事業」及び、市の事業である「かなふり松プロジェクト」を通して、協力校を含めた市内33校の学校に数多く足を運び、教師の指導力の向上に向け、いかに具体的な支援をしていけるかが課題である。

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の  
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成 29 年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	栃木県	番号	09
-------	-----	----	----

協力校名	栃木県鹿沼市立東小学校
------	-------------

1. 当初の課題

平成 28 年度全国学力・学習状況調査の教科に関する調査において、協力校の平均正答率と全国平均正答率を比較すると以下の通りである。

	算数 A	算数 B
全国平均正答率との比較	同程度	やや優れている

主として「知識」に関する問題で、「数と計算」領域における技能面にやや課題がある。設問ごとに見ると、「小数の除法」、「数の大小関係（小数を含む）」、「1 を超えた百分率」にやや課題がある。

また、主として「活用」に関する問題では、「記述式」の問題において無解答率がやや高く、全国の結果と同じ傾向にある。

児童に対する質問紙調査では、「家庭学習に関すること」の「家庭学習の時間」の項目群について、肯定的な回答の割合が全体的に全国と比較して下回っており、課題となっている。

また、授業に関しては、「自分の考えを説明したり、書いたりすることは難しい」や「友達の前で発表する」、「発表の機会が与えられた」については、肯定的な回答の割合が全国を下回っている。

学校に対する質問紙調査では、「児童の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をした」、「児童の発言や活動の時間を確保して授業を進めた」の質問では、「どちらかといえば、行った」と回答しており、教師の指導に対する意識と児童の受け取り方にズレが生じている。

2. 協力校としての取組状況

(1) 授業改善及び教員の指導力向上を目的とした校内研修の充実

ア 授業づくり、授業実践

「学び続ける児童」や主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善について共通理解を図り、それらを生かした授業実践に取り組んだ。

具体的には、これからの時代に求められる資質・能力について勘案し、「数学的に考える力」の育成に重点的に取り組むことで、「学び続ける児童」の育成との関連を図っていった。

また、授業改善については、「対話的な学び」、「深い学び」に焦点化し、教員間で共通理解を図り、授業実践に取り組むこととした。

「対話的な学び」については、子供同士の協働、教員との対話、既習事項を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深めることが実現できているかが重要である。学び合いを単なる考え、意見の伝え合いとするのではなく、自分の考えを広げ深めることとして捉えるようにした。

「深い学び」については、その鍵となるのは、「見方・考え方」であり、習得・活用・探究という学びの過程の中で、数学的な見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることが実現できるかがポイントとなる。

そのためにも、この段階において、児童が数学的活動を行うことによって、学びがどのように深まるかを明らかにしておく必要がある、この点が指導の大切なポイントでもあるため、校内研修を通して十分に共通理解を図りながら、授業づくりを進めていった。

#### イ 思考力・表現力を育成するための指導の枠組の構築

授業実践にあたっては、単元や題材という一定のまとまりの中で、バランスよく題材や育成すべき資質・能力を配置し、意図的・計画的に取り組む必要がある。

そこで、「対話的な学び」、「深い学び」、数学的に考える力である発展的・統合的に考えることを視点とした授業を年間指導計画に位置付け研究推進に努めた。

学年	単元名	題材名
第1学年	たしざん	3+9のけいさん
	ひきざん	12-3のけいさん
第2学年	かけ算(1)	新しい計算を考えよう
	かけ算(2)	チョコレートの数をくふうしてかぞえよう
第3学年	考える力をのばそう	全部と部分に目をつけて
	かけ算の筆算のしかたを考えよう	かけ算のきまり
	はしたの大きさの表し方を考えよう	分数
第4学年	比較量を求める計算	何倍を求める計算を考えよう
	変わり方調べ	変わり方調べ
第5学年	きまりを見つけて	きまりを見つけて
	面積の求め方を考えよう	台形
第6学年	順序よく整理して調べよう	順序よく整理して調べよう
	全体を決めて	全体を決めて
	速さの表し方を考えよう	速さ

(2) 全国学力・学習状況調査問題を活用した授業の実施

単元間に全国学力・学習状況調査のB問題を活用した授業を、年間指導計画にトピック的に位置付け実施した。

B問題の授業化にあたっては、調査問題で示されている「数学的なプロセス」との関連性を明確にすること、どのような数学的な考え方を育成するのかを明確にすること、授業の振り返りの段階で、授業のねらいを踏まえた振り返りを行うことに留意するようにした。

(3) 授業と家庭学習の関連による数学的に考える力の育成

授業で解決した問題(原題)を、発展的に捉えさせ、問題の一部などを替えることにより新たな発展問題を自分の力でつくる。数学的な思考力や表現力の育成をねらいとした授業では、この発展問題を家庭学習の課題とし、本時の学習が本当に理解できたのかどうかの評価問題(適用問題)とする。このような授業展開による家庭学習の関連を図った取組を通して、「数学的に考える力」の育成に努めていくこととした。

また、単元末の評価の段階においては、前述した授業で実施した評価問題を再度出題し、その定着状況を確認することとした。定着の状況により必要に応じて学び直しを行った。

(4) ティーム・ティーチングによる指導の工夫

全国学力・学習状況調査の分析を基に、学年ごとに定着が不十分な学習内容において、ティーム・ティーチングによる指導を実施することとした。学年の児童の実態や授業のねらいに応じて、コース別学習や習熟度別学習を取り入れた。

学年	単元名	
第1学年	なかまづくりとかず	10より大きい数
	どちらがながい	図をつかってかんがえよう
第2学年	たし算のひっ算	計算の工夫
	はこの形	
第3学年	あまりのあるわり算	円と球
	かけ算の筆算(2)	
第4学年	わり算のひっ算(1)	わり算のひっ算(2)
	変わり方調べ	
第5学年	直方体や立方体の体積	小数のかけ算
	四角形と三角形の面積	単位量あたりの大きさ
第6学年	直方体や立方体の体積	比例と反比例
	並べ方と組み合わせ方	

### 3. 取組の成果の把握・検証

全国学力・学習状況調査の結果や、単元末の評価テストの結果、教員によるアンケートの結果から、思考力・表現力の育成が図られつつあると考えている。

思考力・表現力を育成するための指導の枠組の構築や、思考力・表現力の育成をねらった授業改善及び授業の実施、全国学力・学習状況調査問題を活用した授業の実施、評価段階におけるピックアップ課題・学習活動による定着の確認等の取組が有効であったと思われる。

#### (1) 学力調査の結果から

##### ア 平成29年度全国学力・学習状況調査の結果から

小学校第6学年の児童を対象とした平成29年度全国学力・学習状況調査の教科に関する調査において、協力校の平均正答率と全国平均正答率を比較すると以下の通りである。

	算数 A	算数 B
全国平均正答率との比較	やや優れている	やや優れている

主として「知識」に関する問題では、「数と計算」、「量と測定」および「図形」領域が、全国と比較すると優れている状況にある。また、評価の観点の区分では、「数量や図形についての技能」および「数量や図形についての知識・理解」についても、優れている状況にある。さらに、設問ごとに見ると、「加法と乗法の混合した整数と小数の計算をすることができる」にやや課題がみられるが、「商を分数で表すことができる」及び「二つの数の最小公倍数を求めることができる」においては、全国より大きく上回り、優れている状況にある。

主として「活用」に関する問題では、教科の領域および評価の観点の区分のすべての項目で全国と比較すると、優れている状況にある。特に、「量と測定」領域については顕著である。また、評価の観点の区分では、「数学的な考え方」、「数量や図形についての技能」がやや優れている状況にある。さらに、設問ごとに見ると、「示された条件を基に、適切な式を立てることができる」、「割合を比較するという目的に適したグラフを選ぶことができる」については、優れている状況にある。一方、「示された式の中の数の意味を、表と関連付けながら正しく解釈し、それを記述できる」にやや課題があり、無解答率も高かった。

児童に対する質問紙調査では、主体的・対話的で深い学びの視点による学習指導の改善についての質問によると、「小学校5年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していたと思いますか」の質問に対して、約65%の児童が肯定的な回答をした。また、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか」の質問に対して、約70%強の児童が肯定的な回答をした。

また、「家庭学習の時間」の項目群では、すべて全国の肯定的な回答の割合を上回っており、特に、「家で、自分で計画を立てて勉強している」の項目は、全国を大きく上回っている。

## イ 栃木県「とちぎっ子学習状況調査」の結果から

小学校第5学年の児童を対象とした栃木県「とちぎっ子学習状況調査」の教科に関する調査における協力校の算数の調査結果は、県の平均正答率をやや上回っている状況であった。特に、評価の観点の一つである「数学的な考え方」においても、県の平均正答率を上回り、やや優れている状況であった。また、記述式による問題では、5問中すべてにおいて県の平均正答率を上回った。

児童に対する質問紙調査では、「クラスの友達との間で、話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」の質問に対して、74%の児童が肯定的に回答した。

## (2) 校内研修の充実を図った結果から

「対話的な学び」や「深い学び」の視点について、十分に共通理解が図れたか、また、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善がなされたかについて、教員にアンケート調査を実施した。調査結果から、講話で学んだことを基にミニ研修会で検討会を重ねた結果、多くの教員が、授業改善に対する手応えをもてたようである。

### 【アドバイザーや学力向上推進リーダーの講話について（一部抜粋）】

- ・具体的で分かりやすい講話で、今後の参考になった。
- ・一人一人の水準を上げていくのが使命なのだと改めて感じた。そのための方法を段階的に準備するためには、児童の現状をしっかりと把握して予想していかなければならないと思う。
- ・学び合いは、交流し、新たな発見をしたり、自分の考えを見直したりすることにより、学びを深めるものだという考えをしっかりと理解しておかなければならないと思った。ただグループ活動やペア活動をさせるというのではなく、意図をもち、児童の学びが交流によってさらに深いものになるよう工夫を考えていきたいと感じた。

### 【授業改善について】

- ・友達のやり方をきいて「なるほど」とつぶやきながら聞いている児童もいたので、自分とは違う新たな考えに気付くことができた。（1年担任）
- ・一つの考えに固執することなく、新たな考えも柔軟に取り入れることができるようになったと感じた。（1年担任）
- ・交流の場において、友達の考えをただ聞くのではなく、自分の考えと照らし合わせて互いに教え合ったり、新たな考えに感心したりして、交流することが学びにつながっている児童の姿が見られた。（2年担任）
- ・児童の交流により学習課題の解決ができたことで、「教えられてできた」のではなく、「自分たちで分かった」という満足感が生まれ、学習に対して前向きな姿勢で取り組める児童が増えたように感じた。（2年担任）
- ・「自分の考えを図や表や式等で表現する」という活動を繰り返すことで、思考の整理につながった部分がある。また、それを利用して友達に筋道を立てて説明できる児童が増えた。（3年担任）

- ・ほぼ毎時間、自由な意見交換の場を取り入れたことによって、自分の考えを伝えることに抵抗がなくなるとともに、友達の意見も参考になることを感じるようになったように思う。学力の低い児童も積極的に意見交換したり、教えてもらいに行ったりと、意欲的に活動していた。難しい問題でも、多様な考えの中から正しい答えがじわじわ広がっていく様子を見て、交流して学び合うことの大切さと重要性を学んだ。（3年担任）
- ・文章問題は難しいと思いがちだった児童が、文章を区切って丁寧に読んだり図や表に表すことでできまりを見つけたりする活動を繰り返したことで、問題を解くことが楽しいと感じることができた。（4年担任）
- ・友達との意見交換を通して、同じ考え方をもっていることを知ったり、人とは違う考え方をもてたりしたことに満足感をもつことができた。（4年担任）
- ・振り返りをノートに書かせたところ、子どもたちなりに友達のよさを称賛したり、次回への意欲が書かれていたりしたので、とても大切な活動であった。（5年担任）
- ・自分の計算のしかたに固執していた児童が、全体での学び合いを通して、違う方法の良さを目を向けることができた。（5年担任）
- ・授業中の発言やつぶやきが少なく、意見を言える雰囲気ではないクラスである。そのため、自分の考えをそのまま黒板に貼れるように、発表用紙に全員記入する方法により、学び合いを行った。考えを書くことができなかった友達に対して、一緒に考えたり教えたりしている姿もあり、学び合いが成立している場面が見られた。（6年担任）
- ・自力解決→グループでの話し合い、自力解決→全体での話し合いなどのパターンの授業を多く取り入れたことにより、自分の考えをもって話し合いに臨むことや、解決方法も幾通りもあるので色々と考えてみることなど授業に臨む姿勢は育ちつつあったと思う。また、グループでならば、考えを述べることができる児童も増えているのではないかと感じる。（6年担任）

#### 4. 今後の課題

- ・算数の本質を学ぶ研修の充実を行い、深い学びを追究していきたい。
- ・学校全体で取り組んできたが、上学年に重点化したため、思考力・表現力を育成するための指導の枠組の構築が不十分であった。今後は、カリキュラム・マネジメントの視点を生かし、全学年を通じた研究としていきたい。
- ・思考力・表現力においては、どうやったら定着するのかを具体的な授業場面において考えていきたい。また、教師の主観に止まることなく、児童自身が「この場面ではこう考える」と自信をもって自分の考えを表現できるようにするための振り返りのポイントも探していきたい。

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の  
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成 29 年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	栃木県	番号	09
-------	-----	----	----

協力校名	栃木県塩谷町立玉生小学校
------	--------------

## 1. 当初の課題

全国学力・学習状況調査の結果から、本校の児童の学力は、全国や栃木県、塩谷町の平均正答率と比べてやや低い状況にある。特に思考力や表現力についての問題では、全学年を通しての課題が見られた。

こうした結果を踏まえると、まず学習に向かう心を育てて、子供たちの学習意欲を高め、基礎的・基本的な知識や技能を確実に習得させることが必要と考えられる。さらに、それらを活用して思考力や判断力を育成するための授業づくり、地域人材の活用、体験を重視した活動や探究活動の推進、読書活動の充実など、学力向上の取組を進めていく必要がある。その上でさらに児童の学力を高めるためには、学校と家庭・地域が、それぞれの役割を果たし、連携協力していく必要があると考える。

## 2. 協力校としての取組状況

### (1) 心の育成

自己肯定感を高め、学習に向かう集団づくりのために、学習や生活のルールづくりや短学活などでのお互いのよさを認め合う活動を行った。また、物事に粘り強く取り組む力をつけるために、「100 キロマラソン」を行った。授業の前に体を動かすことは、学習に速やかに取り組めるという効果もあった。



### (2) 学ぶ意欲の向上・学習習慣

#### ア 指導体制の工夫・改善

算数科の学習指導においては、担任の他に少人数指導担当者が加わり、学習内容に応じて効果的な指導体制を取り入れて指導した。児童一人一人の実態に応じたきめ細かな指導を進めることにより、学力の向上を目指した。

#### ①少人数指導

学年を均等に分けて、1クラスあたりの児童数を少なくして授業を行う。

#### ②ティーム・ティーチング

担任と少人数担当者と非常勤教育職員が、1つの教室で一緒に授業を行う。

### ③習熟度別指導

児童の習熟度を考慮し、コースを分けてクラスを編成し、授業を行う。

- ・基礎・基本コース（じっくりコース）

教科書を中心に学習するが、繰り返し学習や復習にも時間をとり、じっくりと学習するコース

- ・標準コース（チャレンジコース）

教科書を中心に学習し、さらに発展的な内容にもチャレンジしていくコース

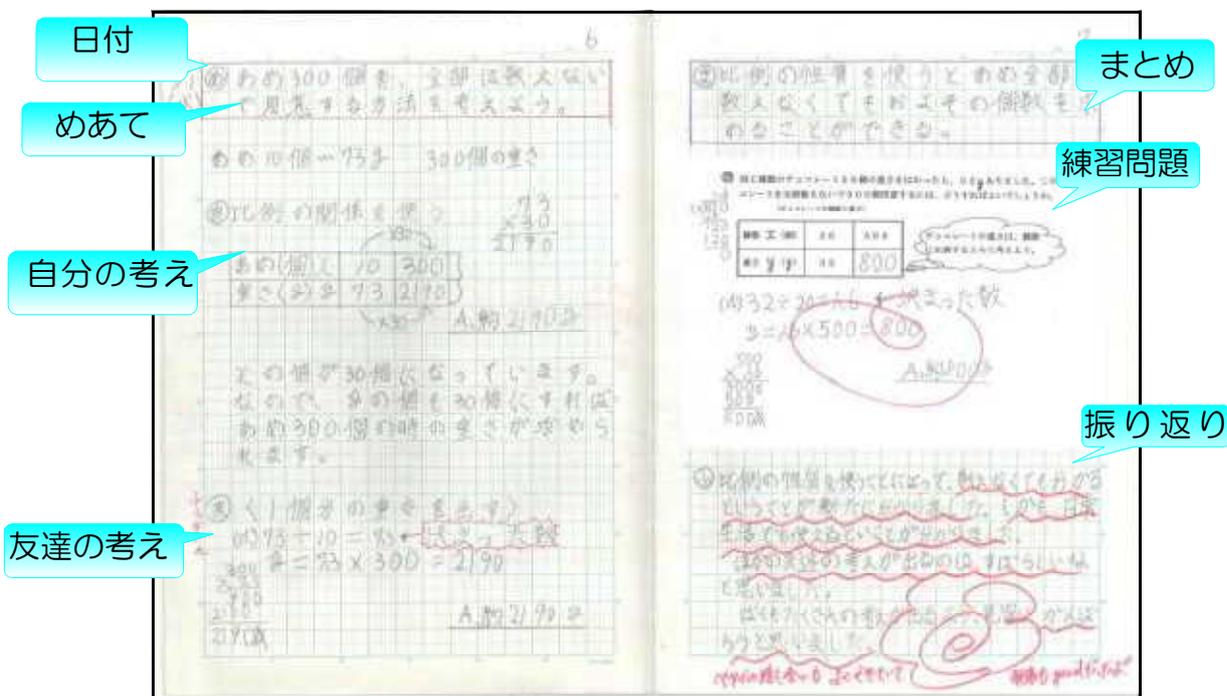
### イ ノート指導の充実

#### ①ノートの使い方の共通理解

ノートの使い方の約束をつくり、共通理解をしながら指導した。ノートで共通して使う記号など（ $\textcircled{\text{め}}$ めあて・ $\textcircled{\text{ま}}$ まとめ・ $\textcircled{\text{返}}$ 振り返り）については、板書でも同じように指導ができるようまとめて作成し、使用した。

#### ②学んだ過程の分かるノートづくり

授業において、めあて・まとめ・振り返りなどを記入し、学んだ過程が分かるノートづくりを進めた。自分の考えを自分なりにまとめたり、友達の考えをメモし、比較検討したりして、学びの足跡を残し、思考の深まりの見られるノートづくりを目指した。授業の終わりには振り返りの時間を確保し、めあてに沿って分かったことを書いたり、次時への課題（もっと調べたいこと、知りたいことなど）を明確にするようにした。高学年においては、ノートの見開きを1時間の学習に当て、自分なりに工夫したノートづくりができるよう支援した。



## ウ 家庭学習の習慣化

主体的に学習できる児童の育成を目指し、宿題以外に音読・自主学習を全学年で実施することで、家庭学習の充実を図った。

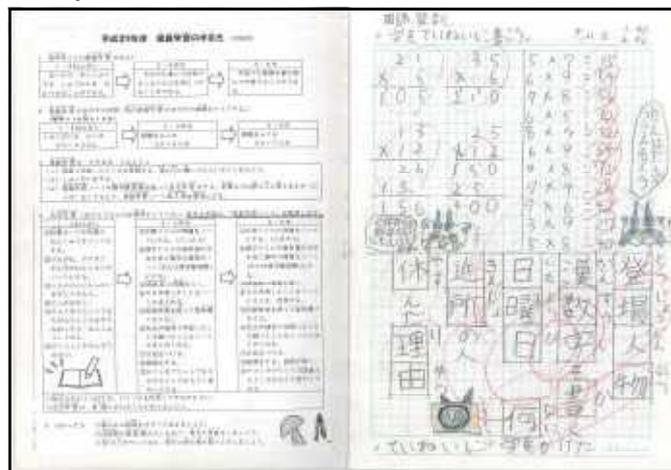
### ①自主学習ノートの活用

「チャレンジノート」として自主学習ノートを全校でそろえて購入し、家庭での自主学習に使用した。めあてや振り返りの書き方など、学習の仕方について指導し活用した。

また、児童の自主学習に対するモチベーションの向上・維持やマンネリ化を防ぐことをねらいとして、チャレンジノートコンクールやチャレンジノートの展示を行った。保護者や児童が他の児童のノートを見ることで、主体的に学習しようとする意識の向上につながった。

### ②保護者への啓発

4月の授業参観日に、2～6年生において学年に応じた自主学習のやり方を「自主学習のすすめ」と題して指導を行った。保護者にも参加してもらい児童と保護者で自主学習の進め方について共通理解させた。



### ③家庭学習強化週間の設定

年3回、定期的に家庭学習強化週間を設定した。家庭学習で児童が取り組んだ課題を記録し、児童自身の振り返りや保護者からの励ましのコメントをワークシートに記入してもらった。同時にノーメディアチャレンジシートを実施して、テレビやゲーム等の視聴時間を減らし、学習時間や読書の時間の確保に努めた。保護者のコメントが児童の励みになっていた。

## エ 読書の推進

本校では、児童の読書への関心を高め、読書習慣を定着させるべく、様々な取組を行ってきた。朝のさわやかタイムの読書や学級文庫の充実、読書週間による児童の読書の機会を設けるだけでなく、長期休業中の親子読書や月1回の「玉生小家読の日」、保護者向け図書室開放日の設定により、家庭での読書も推進した。保護者からは、「貴重な機会がもてた」「これからも親子で読む機会をもちたい」など、好意的に受け止め、取り組む家庭も多く、意識の向上が図れた。

### (3) 学びの質の向上

#### ア 授業研究・教材研究の充実

算数の授業を中心に課題解決型の授業を行い、学習の基礎・基本とともに活用力の向上を図った。研究授業では、言語活動の充実、授業のねらいを共有化し振り返る活動を工夫した授業、各種調査結果を生かした授業などの実践を行った。

#### 【6年 算数 比例をくわしくしらべよう】



自分の考えを書く活動と、言葉で人に伝える説明、話し合いなどの活動を相互に関連付けた授業

研究授業後の研修会では、研究課題が達成できたか、これからの課題は何かを確認することで、授業改善につなげることができた。また、県学力向上推進室指導主事等の外部講師を積極的に活用し、指導・助言を受けることで、教員の意識が高まり、日々の授業実践に生かすことができた。

#### イ 学力調査の分析と活用

「とちぎっ子学習状況調査」(4年・5年)や「全国学力・学習状況調査」において、職員研修で問題傾向や本校児童の結果を分析・検討した。学年の弱みや強みを見つけ出して改善策について話し合った。

フォローアップシートを長期休業中の課題として活用し、その後、フォローアップ確認プリントを行い、定着率を確認した。パワーアップシートについては、単元との関連一覧表を作成し、習熟の時間に活用した。

さらに、学力調査の問題を単元末の「ゆとり」の時間に発展学習として活用できるように年間指導計画の中に綴った。また、「全国学力・学習状況調査」の問題の中から、特に定着を図りたい内容を「活用シート」(問題・解説)「チャレンジ問題」(応用問題)として作成し、すぐに授業の中で使用できるように年間指導計画に綴じ込んだ。

学力調査問題活用シート 単元名 5年「算数の目で見よう」

新島氏 書きの発展的な課題 (課題例-3)

14 多角形と円をくわしく調べよう  
[正多角形と円周の長さ] ⑩  
全  
シ  
ディ  
ネス  
パ  
ワ  
ー  
ア  
ッ  
プ  
シ  
ー  
ト

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16

【年間指導計画 単元題材一覧表 (5年)】

単元「割合」

単元「割合」

## ウ 地域との連携

本校では、様々な体験活動や教科学習を、地域の方の協力を得て行っている。

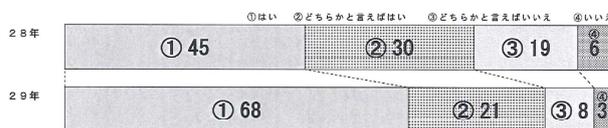
その中でも「地域の人とふれあおう集会」は、本校で引き継がれている恒例行事である。地域の伝統や文化を知り、高齢者や地域の方から学ぶ姿勢を身に付け、児童が主体的に活動できるようにと、毎回地区ごとに工夫がなされている。高学年児童を中心に「自分たちがつくる、進める」という意識が高まり、また、地域の人とふれあうことで、地域を知り、郷土愛を育てることもつながった。地域の方々にとっても、豊かな知識や経験を生かしていただく場にもなり、児童にそれを伝える機会ともなった。

また、外部講師、地域施設の積極的な導入と活用を図り、それぞれの専門性を生かして児童の学びのサポーターとして活躍していただいている。

## 3. 取組の成果の把握・検証

○ノート指導などを行うことにより、自分の考えや意見、学習の振り返り、感想等、自分の思いを書く機会が増え、書くことへの抵抗感が減ってきている。また、12月に調査問題を再び行ったところ、記述式の問題

【学力向上に関するアンケート（児童用）】授業の最後に、学習したことを振り返る活動を、よく行っている。



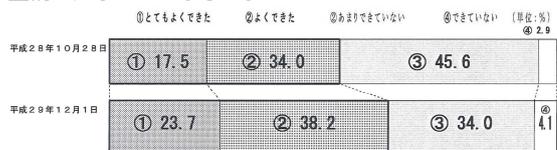
の正答率が大幅にアップし、無回答率も0%となった。自分の考えを自分の言葉で表現しようとする意欲や表現力が付いてきたことがうかがえる。

○学校全体で自主学習の習慣化に取り組んだことで、学習時間が増えた。チャレンジノートコントロールなどによる意欲付けにより、進んで学習する児童が多くなった。また、家庭学習強化週間やノーメディアデーなど、学校からの発信で保護者への啓発もでき、家庭での学習が安定してきた。

【学力向上に関するアンケート（児童用）】学校の授業以外に、普段ふだん1日当たりどれくらいの時間勉強しますか。



【学力向上に関するアンケート（保護者用）】家庭学習が習慣化するよう、学習時間を決めるなど働きかけたり環境整備したりしていますか。



○4月に実施した「とちぎっ子学習状況調査」（4年・5年）や「全国学力・学習状況調査」の意識調査を12月に再度実施し、分析したところ、「授業の中でも、発問や時間を工夫し、自力解決への抵抗感は少なくなってきた。お互いを認め合えるようなよい雰囲気が醸成でき、グループ同士の話し合いも活発になってきた。」（5年生）、「話し合い活動を多くもち、それらを通して自分の考えを深めたり、広げたりすることができている児童が多くなった。ノートを活用しながら、自分の考えを友達に伝えることができるようになってきた。また、お互いを認め合える雰囲気があり、自分の考えを自由に話すことができるようになった。『すごい』『どうしてそうなるの』という発言が自然に出てきた。」（6年生）という変容が見られ、学び合うことのよさを感じている児童が多くなったことがうかがえた。

#### 4. 今後の課題

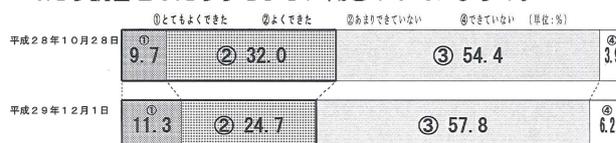
- 「発表することは得意か」というアンケートの調査項目では、「はい」と回答した児童の割合は増えているものの、半数以上の児童がまだ苦手意識をもっている。さらにお互いを認め合えるようなよい雰囲気づくりに努め自信をもたせるとともに、言葉の使い方など、具体的に指導を行っていききたい。

【学力向上に関するアンケート（児童用）】友達の前で、自分の考えや意見を発表することは得意ですか。



- 新聞をテーマにした学習や学級文庫の充実などにより、地域や社会の出来事に関心をもつ児童が多くなった。また、図鑑やパソコン、辞書引き学習などを行うことで、ツールを使うことのよさを知り、

【学力向上に関するアンケート（保護者用）】家庭で新聞を読んだり読書をしたりするように働きかけていますか。



学習意欲も高まってきている。しかしながら、保護者アンケートの読書に関する項目はなかなか伸びない。学習環境の充実のために、さらに家庭への啓発を続けていきたい。

- 授業の中に言語活動を位置付け、「自分の考えを書く活動、言葉で人に伝える説明、話し合い活動」を行ってきた。教師側の働きかけにより、それぞれの思考を深めたり、考えの交流を行ったりすることはできたが、児童が主体となって考えを深めていくことにはまだ課題があると考えられる。さらに主体的な学びができるように、教師の発問の工夫や児童がお互いの考えをつなげていく技能の習得が課題である。

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	栃木県	番号	09
-------	-----	----	----

協力校名	栃木県足利市立毛野小学校
------	--------------

## 1. 当初の課題

本校では、平成27年度全国学力・学習状況調査における全国との比較で、国語Bと算数Bとも全国平均正答率を下回っており、活用問題に課題が見られる。また、国語A・算数Aについても、やや低い傾向にあることから、基礎的な知識・技能の習得や思考力、判断力、表現力等に課題が見られる。

児童生徒質問紙調査の結果を見ると、自分に自信がもてない児童が多く、本県の学習状況調査の質問紙調査でも、自己肯定感や自己有用感が低い児童が多いことが分かる。また、自分で考えて自主的に家庭学習を行う児童が少ない。

このような現状から、本校児童が、自己肯定感や自己有用感をもち、自分を表現することで生きて働く学力を身に付けさせるために、学校課題「学び合い高め合う子どもの育成」～授業改善や指導力向上のための実践を通して～ を捉え直し、更に充実させることで課題解決に迫ろうと考えた。

## 2. 協力校としての取組状況

### (1) 教師力（指導力）の向上を目指した研修

#### ア 教師一人一人の課題に基づいた訪問研修

本市の史跡「足利学校」に伝わる「自学自習」の精神のもと、教師が積極的に先進校を訪問して研修を行い、その研修で得た成果を指導力向上や授業改善に生かしていこうと考えた。

まず、「学び合い高め合う子ども」を育成するために自分の課題を考え、明らかにした。そして、課題解決を図るために相応しい学校を自分で選択し、一人一人が主体的に訪問研修を行った。

訪問校は関東一円に亘り、公開研究校を選択するケースもあったが、半数以上は自分で選んだ学校に直接依頼して訪問研修を行った。

	H28年度	H29年度
訪問校数	43校	23校
研修人数(延べ)	54人	29人

\* 毛野小：学級数21(通常18+特支3)

それらの学校では、子どもの学び合う姿や、学び合いに向けての教師の具体的な手立てを見取ることができ、大変貴重な研修となった。これらの訪問により、課題解決の手立てのヒントを学ぶとともに、子どもたちの「学び合う姿」を目の当たりにしたことで、授業における具体的なイメージをもつことができた。そして、帰校後は訪問で得た成果を「授業に生かしたい取組」としてまとめ、その後の授業実践に生かした。

#### イ 同僚性を生かした校内研修

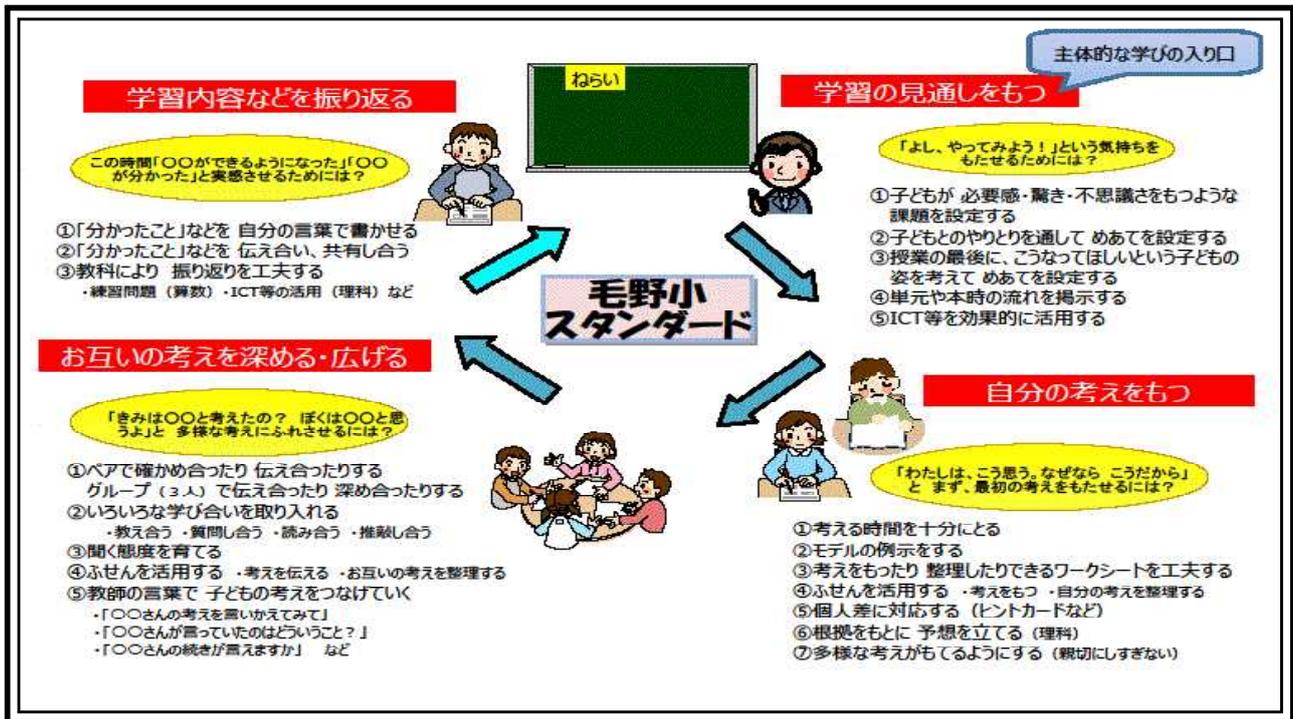
研究授業後の各学年やブロックでの協議はワークショップ形式で行い、視点を明確にした実質的な話し合いや若手教師の積極的な発言のある研究会を目指した。そして、各分科会の成果と課題を全体で共有できる時間を確保するなど、全体会の持ち方を工夫した。

協議の場では、「(授業では)子どもたちがグループで一つの原稿を読むことで、訂正や付け足しに気づけていた。その後の書き直しも個人でなくグループで行うと、ねらいに達成でき



程にそれぞれ集約し、目指す授業スタイルとして「毛野小スタンダード」を作成した。

「毛野小スタンダード」を基にして、あるいは活用して授業を行うことにより、日々の授業の改善が図られ「学び合い高め合う子ども」が育てられると考えた。



ウ 「毛野小スタンダード」に基づいた授業実践と児童の変容

研究授業（一人1授業）を進めるにあたり、学年ごとに研究教科と「毛野小スタンダード」の4つの過程のどの過程に重点を置いて実践していくかを決めた。

各学年の研究教科（H29）

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特・支
研究教科	国語	国語	算数	算数	国語	理科	各教科単元

研究授業の指導案には、重点を置いた過程およびその過程の中でどのような具体的な手立てを行っていくかを明記した。また、訪問研修で得た具体的な手立てには波線を引いた。

例：4年算数科学習指導案（抜粋）

(4) 研究主題との関連〈「毛野小スタンダード」とのかかわり〉

① 重点を置いて実践したい過程（○）

○	「学習の見通しをもつ」過程
	「自分の考えをもつ」過程
○	「お互いの考えを深める・広げる」過程
	「学習内容などを振り返る」過程

② 各過程の具体的な手立て

- ・「学習の見通しをもつ」過程では、単元での初めての活用問題なので、問題で何を聞いているのかが分かるように、黒板に大きく図を示しておく。そうすることで、「やってみよう」「できそうだな」という気持ちをもたせていく。
- ・「お互いの考えを深める・広げる」過程では、グループ学習（トリオ）を取り入れ、一人で解決できないときには友達に聞けるような形態をとりたい。また、全体で考えを共有する活動では、教師の言葉で児童の考えをつなげていくようにしたい。そのとき、発表児童と教師との一対一のやりとりにならないようにする。また、本棚を作れる数は、一番少ない「くぎ」に合わせるとよいことに気付かせるために、児童の言葉を借りて問い返しをしたり、ペアで確認させたりして全体で共有する。

（注：~~~~は訪問研修から得た「授業に生かしたい取組」）



全教員が「毛野小スタンダード」に基づき授業を実践してきたことで、「学び合い高め合う子どもの姿」（目指す子どもの姿）が見られるようになってきた。特に、「お互いの考えを深める・広げる」過程に重点を置いた実践を重ねたことで、授業の中で友だちと自然に学び合う姿が多く見られるようになった。



「学び合い高め合う子どもたち」

また、児童の意識にも変化がみられるようになってきた。

下の表は、2年生から6年生までの5学級の児童を対象にした、研究授業前と授業後の意識の変化を表したものである。

＜児童の意識の変化（授業前・授業後のアンケートより）＞		%＝「はい」＋「どちらかといえば はい」			
質問項目		授業前	授業後	増減	
①	国語・算数・理科が好き	79.1%	83.7%	4.6P	○
②	学習に進んで取り組んでいる	78.3	83.4	5.2	◎
③	友だちとの話し合いに進んで参加している	81.4	86.5	5.0	◎
④	授業のめあてが分かっている	90.5	90.9	0.4	※
⑤	授業の最後に、学習したことをふり返る活動をよく行っている	72.0	79.8	7.7	◎
⑥	友だちと話し合い、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている	77.6	77.1	-0.5	▲
⑦	クラスは、発言しやすい雰囲気である	82.4	84.2	1.8	
⑧	友だちと話し合うとき、友だちの話や意見を最後まで聞くことができる	86.2	90.8	4.7	○※
⑨	学び合うことが好き	76.1	83.1	7.0	◎
⑩	授業の中で、友だちがいてよかったと思う	91.1	92.8	1.7	※
⑪	授業の中で、友だちの役に立っていると思う	66.7	69.4	2.7	

対象児童：6月に研究授業実施の2年～6年各1学級 計5クラス

授業後にポイントが特に増えたのは、②学習に進んで取り組んでいる、③友だちとの話し合いに進んで参加している、⑨学び合うことが好き、である。授業の中で友だちと自然に学び合う姿が多く見られるようになってきたが、この調査からも、児童が授業（話し合い・学び合い）に積極的に取り組むようになってきたことが読み取れる。



また、大きな増加こそないが、普段から割合が高いのは（※）、④授業のめあてが分かっている、⑧友だちと話し合うとき友だちの話や意見を最後まで聞く、⑩授業の中で友だちがいてよかったと思う、である。研究授業に加え、「毛野小スタンダード」に基づきそれぞれの教師がこれまで取り組んできた成果と考えられる。

本校児童の課題の一つである⑪の自己有用感については、増加傾向は見られるものの、まだ十分とは言えない。これからも、児童の自己有用感を高めるように取り組んでいく必要がある。

### (3) 学力調査等の結果の有効活用

#### ア 正答率が低い問題への対応

本校と県との正答率の差が－10ポイント以上の問題を抽出して各学年の教科書に添付し、活用した。

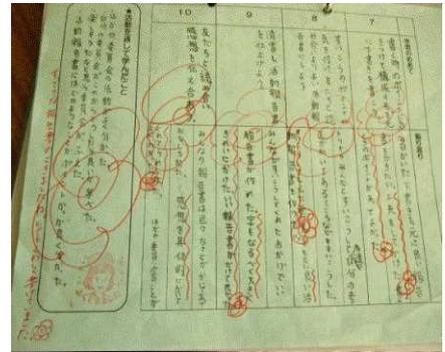
イ 県教委作成のパワーアップシートの活用

パワーアップシートを評価問題として活用した。

ウ 今年度の重点課題（学力向上改善プラン：栃木県）への取組

「学習のめあて・振り返り・活動を通して学んだこと」

今年度、記述式の問題に課題が見られたことを受け、自分の考えをもち、書くことの指導の充実を図るため、『毛野小スタンダード』の「自分の考えをもち」過程や「学習内容などを振り返る」過程で、「分かったこと」などを自分の言葉で書く活動を意識して取り入れた。繰返し行うことで児童が書くことに少しずつ慣れ、力がついてきた。



(4) 家庭学習の推進

ア 「家庭学習の手引き」の改善

既存の家庭学習の手引きを、児童の家庭学習の実践に直接つながるように、また、低・中・高学年の連続性・系統性に留意して見直し、作成した。

イ 家庭学習の推進

「家庭学習の手引き」を各家庭に配布し、保護者の理解と協力を得るとともに、各学年において学期ごとに授業参観後の保護者会で周知・啓発を行った。

児童の家庭学習（自主学習）の取組を毎日、保護者は「家庭学習カード」にサインをし、教師はノートを見取るなどして励ましている。このため、本校児童全員が自主学習に取り組むようになっている。

「家庭学習の手引き」



※ 県教委資料を一部活用

「自主学習ノート」

「家庭学習カード」

### 3. 取組の成果の把握・検証

#### (1) 全国学力・学習状況調査の結果から

- 平成29年度の全国学力・学習状況調査の「教科に関する調査」では、国語A（主として知識）・国語B（主として活用）・算数A（主として知識）・算数B（主として活用）の全ての教科で、全国平均正答率との差が縮まり、平成27年度や平成28年度の調査と比較すると正答率が向上した。これは、調査対象の児童が異なるため全て研究の成果とは考えられないが、指導方法の改善による成果も含まれると考える。
- 全国学力・学習状況調査の「児童に対する質問紙調査」では、「学習に対する関心・意欲・態度」「規範意識・自尊感情」「学習の基盤となる活動・習慣」の全ての領域で、平成28年度の調査結果より肯定的に回答している児童の割合が高くなった。これは、教師の日々の授業に対する意識の変化や指導方法の改善及び家庭における学習環境の向上が影響していると考えられる。

#### (2) 教師力（指導力）の向上および授業改善について

- 全教職員の同僚性がさらに高まり、意欲的に学力向上を目指した研究に取り組むことができた。
- 訪問研修や授業研究を通して、目指す「学び合い高め合う子どもの姿」や目指す授業スタイルについて共通理解ができ、授業に対する意識が変わり、授業改善や指導力向上につながった。
- 児童の主体的な学びを育てるための「毛野小スタンダード」を作成し、日々の授業改善に取り組むことができた。特に、「お互いの考えを深める・広げる」手立てとして、ペアやグループなどを積極的に取り入れた結果、教え合ったり、質問し合ったりする児童の学び合う姿が多く見られるようになった。

### 4. 今後の課題

- 全国学力・学習状況調査の「教科に関する調査」から、国語及び算数のどちらの教科も記述式の問題の正答率が低くなっている。この課題を解決していくためには、日々の授業において、「目的や意図に応じ、自分の考えを書く」、「目的に応じて、自分の考えを明確にしながら読む」、「図や式を関連付けて、式の意味を説明することができるようにする」等の力が着実に身に付くような学習活動を展開していく必要があると考える。
- 単元をとおして児童に身に付けさせたい力が着実に身に付いたかどうか、的確に評価していくための検証方法を見直していく必要がある。
- これまで取り組んできた「毛野小スタンダード」に基づいた授業実践は、新学習指導要領に示されている「主体的・対話的で深い学び」に通じているといえるだろう。しかし、学習の見通しがもてるような課題の設定や、児童の学びの定着につながる振り返りがまだ十分とはいえない。これからも、本校が授業改善の手立てとして作成した「毛野小スタンダード」をさらに充実させ、着実な実践に取り組んでいく必要がある。